

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23268

研究課題名（和文）母親の政治参加に関する課題の検討 - ケア労働者の政治運動に着目して

研究課題名（英文）Consideration of Challenges Regarding Mothers' Political Participation: Focusing on Political Movements of Care Workers

研究代表者

元橋 利恵 (Motohashi, Rie)

大阪大学・大学院人間科学研究科・招へい研究員

研究者番号：50846748

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本における母親業を担う女性たちのインタビュー調査を通して、既存の政治参加のモデルでは参画から遠ざけられるケアする人の政治参加の困難と可能性を明らかにしている。本研究では、ケアする人がケアしケアされるためのニーズを語り、聞き届けられることが可能な「政治的ケア」やケアする人を対象にした支援の枠組みが社会的条件として必要であることを立論した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、ケアの倫理に根差した議論が注目され、ケアの営みの重要性が認知されつつありますが、ケアを担う人、特に母親業のような私的かつ家庭内でおこなわれるがゆえに見えないケアを担う人がいかに政治参加していくのかについては議論が不十分でした。本研究では、ケアに根差した政治、社会を構想するために重要な、ケアする人が政治参加にいかなる困難を抱えているのかを母親業を担う人の運動や日々の経験の語りから考察し、私たちのもつ政治観そのものの変化の必要と、ケアする人の声が聞き届けられる支援体制の必要性を論じました。

研究成果の概要（英文）：This study revealed the difficulties and possibilities of political participation for caregivers, which are often overlooked by existing models of political engagement, through interviews with women in Japan who burdened maternal caregiving responsibilities. The research argues that there is a need for a framework of "political care" and support tailored to caregivers, wherein their needs as both caregivers and recipients of care are voiced and attentively addressed. This framework is posited as a necessary social condition to facilitate the political participation of caregivers.

研究分野：社会学、ジェンダー論

キーワード：ケアの倫理 母親業 母性 政治参加

1. 研究開始当初の背景

家事や育児、介護のような私的かつ家族内の活動は、近年ケア労働として、人間社会において重要かつ不可欠な営みとして可視化されるようになってきた。キャロル・ギリガンによって提唱された「ケアの倫理」の概念と議論も注目が高まり、これまで言語化されてこなかったような、ケアの営みにおいて私たちがおこない、培われている思考や実践が学問的に評価されるようになりつつある。ゆえに、ケアを担う人の経験や視点は社会の意思決定においても重要な意味をもつと考えられる。しかしながら、ケアを担う人は已然として、公的領域から排斥される傾向にあり、その活動の性質からもニーズが認知されにくく可視化されにくい。有償か無償かを問わず、ケア労働者の権利や安全の問題には多くの課題がある。特に、ケアを担う人は、ジェンダーの権力関係から女性であることが多く、また物理的・時間的制約のなかで、政治的コミュニケーションや政治運動へ参加することに多くの困難があると考えられる。

2. 研究の目的

そこで、本研究課題では、ケアする人が政治参加するためにはいかなる社会的条件が必要であるのか、もっとも私的かつ隠されやすい活動である母親業を中心に、ケアを担う当事者の経験から考察していくことを目指した。そのためにも、そもそも「政治参加」とは何か、「政治的なもの」とはいかなるものであるのかからとらえ返すことも本研究の大きな目的となる。市民運動など政治活動への参加は、依然として、時間的・空間的自由を有するケアを免れた成人でなければ難しい現実がある。ケアに根差した政治文化を構築していくためにはいかなる視点が必要であるのか、考察し、提言していくことが必要である。

3. 研究の方法

本研究では主に、(1) 理論研究としてケアとマザリングに関する理論的潮流の把握と発展、(2) 日本における母親たちの政治・平和運動の担い手に対するインタビュー調査、(3) 日本において母親業を担う女性たちへの政治参加についてのインタビュー調査、という二つの研究方法を用いた。なお、当初は予期されていなかったこととして、2020年度～2022年度は新型コロナウィルス感染拡大の影響により、負担や感染リスクが増大した母親業を担う女性たちに対して、実質的に調査をおこなうことが難しい状況が続いた。本研究において、当事者のナラティブの聞き取りは必須の方法であるといえるが、研究対象者の心理的・物理的安全を優先し、その期間は聞き取り調査の実施を見送っていた。

4. 研究成果

(1) 理論研究としてケアとマザリングに関する理論的潮流の把握と発展

報告者は2021年には単著『母性の抑圧と抵抗 ケアの倫理から考える戦略的母性主義』を出版し、出版に関連し講演会や母親研究者らとの対談イベントを通じ、議論や知識の市民社会への還元をおこなってきた。本研究ではジェンダーニュートラルな「子育て」ではなく、「母親業」の語を用いている。母親業の語を採用することで、子育てが実体としては、その大部分が母親である女性によって担われていることを読者に想起させ、女性の労働や政治参加の困難を可視化させる側面がある。本研究では、ケアの倫理を分析の視座として用いて、日本の母性研究の批判的検討と母親業を担う人への抑圧の構造を明らかにしてきたが、日本国内ではケアの倫理の議論においても、母親業にフォーカスし、政治的实践を読み解いていく実証的な研究は本研究を除いてできておらず、特に、母性研究として母親業の抑圧的な側面が強調されてきたジェンダー、フェミニズムの視点からの研究の限界をこえるインパクトを有しているといえる。

国外へのインパクトとして、近年、上述したようなケアの倫理と視座を共有しているマザリング (Mothering) という、母親たちの母親業の経験や実践を、社会変革やエンパワメントとして評価する研究枠組みが、登場し、学会も立ち上げられている (International Association of Maternal Action and Scholarship)。報告者も、日本の母親研究者らと共に研究交流活動を継続して進めており、国外学会や国際的な学術会議での報告をおこなってきた。本研究の成果は、国際的な視座を有しつつ、今後日本の母親研究としてさらに深めていくにあたって、その基盤となると評価をいただいている。日本社会では家父長的な家族内の慣習や性別役割分業における女性のケア負担が大きく、母親業を担う女性の政治参加やニーズの可視化に大きな後れがあり、その実態の把握と克服のための議論が大きな課題となっている。

(2) 日本における母親たちの政治・平和運動の歴史、現状、課題

本研究では、2022年度に「母親大会」と呼ばれる母親たちの政治運動の担い手を対象に複数

回聞き取り調査を実施した。「母親大会」は日本の各都道府県に連絡会を有しており、各地域によって異なる活動や課題に取り組んでいるが、全国的な平和運動のネットワークとしても機能している。本調査では鹿児島、沖縄の「母親大会」の取り組みの過去と現在について聞き取りをおこなった。今後さらに研究を進めていくにあたって重要な視座を得ることができた。第一に、女性・母親であることと平和への意識は互いに共鳴するものであるという理念が共有されている。活動の中心的な担い手には子を持たない女性も少なからずおり、子育て経験の有無に関わらず共有されていることがわかる。このような理念は、母親大会のコミュニティではどのように共有されており、また現代社会においては広がりをもつものであるのか等、今後の課題として検討していく。第二に、母親大会の担い手は労働組合を通じて運動に関わるなど、他の運動組織とのゆるやかな連携の上で成り立っている側面がある。しかし、近年運動の担い手である女性が労働と家庭の両立などで多忙化し、市民運動に継続的に関わるのが難しいなど、世代交代や担い手の不足が課題となっている。今後も引き続き、母親たちの政治運動を、対象を広げつつ歴史、現状、課題の実態の把握を行っていく必要がある。

(3) 日本において母親業を担う女性たちへの政治参加の困難と課題

本研究では、2023年度を中心に、障害のある子どもを育てる母親である女性たちに複数回のインタビューをおこなってきた。母親業を担う女性は、自己の都合やニーズよりも、子のニーズに応えることを優先せざるを得ない。そうした女性の状態は、自身の権利や功利性を主張することが求められる政治的主体の条件とは相容れない。さらに、成長するに連れて、依存の程度が相対的に減じるいわゆる「健常」の子の母親業ではなく、生涯を通して相対的に大きな依存状態にある障がいのある子の母親業を担う場合、そうした女性が政治的主体となる可能性は一層困難となる。そこで、本論文では母親業を担う女性の政治的主体化の可能性をより広範囲に論じることを目指して、障がいのある子をもつ母親を対象としている。研究成果として、北海道社会学会『現代社会学研究』第37巻掲載の論文「ケアを語るという政治 障害者の母親業を担うある女性のライフヒストリーから」をまとめている。

本論文では、「政治的なもの」への参加が、女性が多くを占めるケアを担う人に閉ざされている問題を取り上げている。ここでの「政治的なもの」とは、議員立候補や政党活動といった特定の政治活動への参加ではなく、そうした行動を導く主体形成や社会関係を指す。そして、ケアする人がなぜ政治的主体となれないのか、またその活路について、障がいのある子の母親業を担う女性のライフストーリーの分析を通して、ケア経験の語りによる政治的主体形成の可能性を提示している。ライフストーリーの分析から、「障害者のお母さん」は弱音を吐かず前向きで、自分で問題を解決できるというマスター・ナラティブと、それに対して「葛藤するわたし」というオルタナティブなストーリーが描かれている。マスター・ナラティブは、障害者の母親という役割を受け入れることであると同時に、子の個別的なニーズに対する公的な支援や制度の不足を母親が補うことを意味するストーリーであり、そこには母親による制度の改革を促す行動といった政治的な抵抗のプロセスは含まれない。それに対して、「葛藤するわたし」のストーリーは、母親が補うものとされていたばかりにかき消され、「なかったこと」にされていたケアのニーズを浮かび上がらせるものであり、社会問題を構築していく政治的な抵抗のプロセスを駆動させる。ケアする人が政治的主体となる可能性として、同論文では、そうした「葛藤するわたし」というオルタナティブなストーリーが語られることと、そうした語りを促し、支える社会関係の重要性を示している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 元橋利恵	4. 巻 37
2. 論文標題 ケアを語るという政治 障害者の母親業を担うある女性のライフヒストリーから	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 現代社会学研究	6. 最初と最後の頁 23-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 元橋利恵	4. 巻 774
2. 論文標題 書評 池松玲子著『主婦を問い直した女性たち』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大原社会問題研究所雑誌	6. 最初と最後の頁 55-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 元橋利恵	4. 巻 99
2. 論文標題 書評 家族は他人、じゃあどうする？子育ては親の育ち直し 竹端寛著	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ムービング	6. 最初と最後の頁 11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 元橋利恵	4. 巻 18
2. 論文標題 ジェンダーをめぐるキーワード：ケアの倫理	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ジェンダー史学	6. 最初と最後の頁 63-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 元橋利恵	4. 巻 6
2. 論文標題 母性と体制 自己犠牲とロマンチズムをこえて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シモーヌ	6. 最初と最後の頁 128-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 元橋利恵	4. 巻 5
2. 論文標題 フェミニズムの否認がもたらす差別の見えなさ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史地理教育	6. 最初と最後の頁 10-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 元橋利恵	4. 巻 3
2. 論文標題 復興の影にあるもの 日本社会における「母なるもの」への依存と侮蔑	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 fvissions	6. 最初と最後の頁 32 - 35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 元橋利恵
2. 発表標題 ケア・フェミニズムの視点から考える「政治的なもの」 母親たちの語りから
3. 学会等名 第 71 回北海道社会学会大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Motohashi Rie
2. 発表標題 Rethinking "Political" Mothering: A Narrative on the Mothering of Children with Disability in Japan
3. 学会等名 International Association of Maternal Action and Scholarship Conference 2024 (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Motohashi Rie
2. 発表標題 The Gender Politics of Care in Japan: How It Can Be Addressed with the Principle of Self-Responsibility Supported by Neoliberalism and Devaluation of Care Activities
3. 学会等名 Gender and Prosperity inAsia (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 元橋利恵
2. 発表標題 SNSがもたらすフェミニズム展開における政治的団結に関わる課題
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会2021春季大会シンポジウム 『「差別」のメディア的構造？ SNS時代の公共圏 』
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 元橋利恵
2. 発表標題 ケアする人の政治的エンパワメントの重要性
3. 学会等名 唯物論研究協会 第43回総会・研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Rie Motohashi
2. 発表標題 A Mother's Political Activism Resists "Patriarchal" Neoliberalism in Japan: Considered through the Movement "Mothers Against War"
3. 学会等名 International Association of Maternal Action and Scholarship Conference 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 元橋利恵
2. 発表標題 『母である私』として政治に参加するとは 『安保関連法に反対するママの会』参加者へのインタビューを通して
3. 学会等名 第92回日本社会学会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 ジェンダー事典編集委員会、松本 悠子、伊藤 公雄、小玉 亮子、三成 美保	4. 発行年 2024年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 2
3. 書名 ジェンダー事典	

1. 著者名 元橋利恵	4. 発行年 2022年
2. 出版社 松香堂書店	5. 総ページ数 156
3. 書名 フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦 オルタナティブな社会の構想	

1. 著者名 元橋利恵	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 234
3. 書名 母性の抑圧と抵抗 ケアの倫理を通して考える戦略的母性主義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>・市民講座での講演などを通しての研究成果の還元</p> <p>総合社会福祉研究所第二八回社会福祉研究交流会での講師「ケアを大切にできる社会へ」2023年8月 豊中男女共同参画センターすてっぷ 生きるための「なぜ？」を考えるフェミニズム連続講座2023 第1回講師「ケア・フェミニズムから考える「自己責任化した母性」」2023年10月7日</p> <p>・母親の生きづらさに関わる、メディアへの取材協力</p> <p>小学館『女性セブン』2022年6月16号pp.131 - 133 「『母親になって後悔してる』が描くタブーに共感が殺到している理由」2022年6月 『毎日新聞』2022年8月21日 「『母になって後悔してる』タブーにあらがう女性たちの赤裸々な告白」にインタビュー掲載、2022年8月 NHKクロースアップ現代 「『母親の後悔』その向こうに何が」特集webページ 「『母親にならなければよかった』？女性たちの葛藤6000人アンケート結果」にインタビュー掲載、2022年 https://www.nhk.or.jp/minplus/0029/topic099.html ベネッセ『たまひよ』への取材協力、インタビューの掲載 「子どもは愛してる。でも母親になったことに後悔はない？【専門家】」2023年8月 https://st.benesse.ne.jp/ikujii/content/?id=166707 ベネッセ『たまひよ』への取材協力、インタビューの掲載 「母親たちが感じる仕事と子育ての両立に対する『葛藤』。それは、日本のかたよったケアレス・マンモデルのせいでは？【専門家】」2023年8月 https://st.benesse.ne.jp/ikujii/content/?id=166708 『北海道新聞』への取材協力 『埼玉で自民が条例改正案撤回「留守番は虐待」漂う家父長制』 2023年11月11日 日刊 掲載 千代田区男女共同参画センターへの取材協力、インタビュー掲載 「誰もがケアしながら働ける社会に」 『千代田区男女共同参画センター情報誌MIW』 2024年3月</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------